〔連載〕武蔵御嶽神社宝物シリーズ10

金剛蔵王権現の懸仏

日本風俗史学会会員
青梅市文化財保護審議会委員
齋藤慎一

武蔵御嶽神社が、「金剛蔵王権現」を奉祀していた中世の信仰の様子を伝えるのが、懸仏（御正体）四面である。

その最も古い鎌倉期の一面が、一九九九年九月・十月、池袋東武美術館での「役行者神変大菩薩一三〇〇年遠忌―役行者と修験道の世界」展に、全国的視点で集められた中世以前の蔵王権現の懸仏二九面の一面として展示された。

この時受けたこの懸仏の洗練された製作という印象をもとに調査した結果を紹介する。

この銅製の懸仏の縦横の径は46.7～46.6cm、重量5.1kg。表面は精巧に研磨し鍍銀するが、裏面に槌のうち目があり、鍛造と知れる。鍍銀は、仏体・天蓋を取り付けた跡や覆輪欠失部分にも鮮明に残る。

さて懸仏の始源は神鏡で、その鏡面に尊体を線刻し、やがて立体化して高肉彫の尊体を取り付け、種々装飾も加え、ついに鏡面を尊体と共に鋳造するに至るという沿革をもつ。要するに神鏡に仏神の姿が顕現するわけで、懸仏を御正体と呼ぶ理由もここにある。

従って御嶽神社の懸仏の表面が鏡と同じく銀色であった事は、懸仏として古い始源的様式を伝える意匠といえる。一方、幅0.6cm、高0.3cmの鍍銀の削り出した輪縁一重を五本の鍍銀の釘で止め、内・外区を区郭するなど装飾的傾向は時代の下降を示す。

外縁には鍍銀の覆輪（高0.58～0.57cm、幅1.58cm）を上部の二箇所（一は右の鐶座下）で合わせ計十八個の菱鋲（縦1.62cm横1.83cm）で止める。仏具を菱鋲で飾る例は奈良西大寺の鎌倉期の舎利塔に例がある。通常は笠鋲を打つのである。菱鋲は三個及乃至二個を吹寄せに打ち、その足は銅の割根である。覆輪の内側の幅3.4cmの外区には長6.0cm、鉆のひらき2.2cmの鍍金の三鉆杵九個を配する。三鉆杵の上下の約条を珠文帯に意匠するなど精巧な彫技を示す。

金銅だったはずの吊手鐶は欠失。全体が金銅の鐶座は切子頭（1.70cm×1.71cm×1.75cm）の鐶台で、穴の径0.76cm。平安後期の貴重な切子頭の例は当社の国宝赤糸威鎧の大座（1.76cm×1.85cm×1.38cm）と水呑の緒の鐶座（0.82cm×0.83cm×0.6cm）がある。これに比較して本例が腰高なのは時代的下降を示す。鐶座は省略傾向を示して一重、花尖（葵葉）形ではあるが、猪目もない。切子頭の下に菊芯と菊座、次に羽毛文を蹴彫とする。羽毛文は本来は迦陵頻・鳳凰・鶴など鳥の羽、竜の鱗に刻むのだが、鎌倉中期頃、他の器物の文様とされた時期がある。管見では、京都・仁和寺鎌倉期の三鉆杵や奈良・春日大社の梅金物赤糸威鎧（国宝）の鍬形などの例がある。御嶽の羽毛文はやや崩れがみえるが、年代推定の有力な根拠となる特徴である。

鋳銅高肉彫の本尊は、焔髪から左足の踏割蓮華（座）まで23cm。面部で4.0cm、胴部分で3.5cmの高肉の鋳造で重量1.6kgである。左肩に条帛、腰に裙（裳）をつけ、右手に鉆杵（欠失）を握ってあげ、左手は剣印を結ぶ。全体は鍍金で、焔髪と口唇を朱塗とし、天冠台をいただく。踏割蓮華は請花に刻み、幅5.6cmで鍍金、足裏に釘でとめる。右足下の蓮座欠失、内区縁より1cm上にうちつけた釘穴と鍍銀が白く残ってもとの位置を示す。

蔵王権現の四肢の肉取りは豊かで、ほどよく様式化されたすぐれた造形である。その地鉄の厚い部分は0.85cm、左側面はきわめて薄く、彫刀の切り込みすぎた穴がある。右手の鉆杵（独鉆か三鉆）は、木芯金銅包みで拳の中に、さし込まれた一部が残る。裏面の上下に一文字の湯口を加工して円孔をあけた方形の枘があり、鏡面の上縁より14.9cm、下縁より16.1cmの位置にあけた方形の二箇所の枘孔に栓ざしで止める。下の枘穴の右上に接して拙劣なあけ方をした不要の穴（遊穴）は後代の加工で、一時期、像の位置を上方に移動したか、別の蔵王権現像が取り付けられていたと推定される。大正一四年の東京府の調査報告書には、別の蔵王権現をつけた写真が収載されている。また現在は剥ぎ取られているが、もとは頭部に朱塗の銅の円光が三本の釘で止められていたので、6cm程残る。

蔵王権現の左右につけられた華瓶は右のみ残り、左は止釘の穴だけ残る。高肉彫の鍍銀の肩のはらない華瓶で、頸に一条、胴部に二条、台脚部に一条の紐（約条）を彫る。銅の釘金の茎に金銅の荷葉七茎、開敷の華二茎で九茎。蓮花は二重に重ねて、菊花状の葉脈など精緻な技法である。華の芯には、群青のガラス玉を針鉄で止める。色の鮮やかな左の玉は径0.43cm、右は0.53cm。多摩に残る中世のガラス工芸として貴重である。茎に白いガラス玉が残るが、これは、葉の表面に数個の穴があるので、露として葉を飾ったものであろう。

内縁の覆輪の上部を6.0cm程切り欠き、覆輪の切れ目が斜めであるのは、ここに天蓋をつけたからである。天蓋には、瓔珞が下げられそれを群青や白のガラス玉が飾っていた可能性がある。蔵王権現の像が中心より5.0cm程も下方にとりつけられ、焔髪の上に広い空間があり、左足が内区を踏み出す位置である（これがかえって躍動感を造形するのだが）のは、かっての天蓋の存在をよく示しているのである。

その天蓋・瓔珞は恐らく鍍金の彫金で、瓔珞は群青や白のガラス玉、切透の金物で何条も長く垂下し、ガラス玉で飾られた鍍金銀の蓮華瓶に荘厳された銀色に金の縁どりの鏡面。朱色の焔髪に、金色の蔵王権現、朱色の円光を配したこの懸仏の色彩の美しさは中世の人々の目を奪うものがあっただろう。

その工芸・意匠・彫技の精巧・華麗さは、中世の武蔵御嶽神社・金剛蔵王権現への信仰の深さと、隆盛をよく物語ってあまりある貴重な鎌倉中期を前後する遺例と思われるのである。本市指定有形文化財。

本調査にあたり、伊藤博司氏、木下裕雄氏、北村和寛氏の協力を得た。写真は、青梅市郷土博物館の提供である。